

研究ノート 多様な機会は信頼を育むか？ 大学生の信頼感についての調査研究

その他のタイトル	Does a diverse opportunity nurture trust? - A survey study on the general trust of college students -
著者	林 直保子
雑誌名	社会的信頼学
巻	1
ページ	43-52
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/7750

多様な機会は信頼を育むか？ —大学生の信頼感についての調査研究—

林 直保子¹

【要 約】

本研究は、大学の偏差値と大学生の一般的信頼の関係について再検討することを目的としている。山岸(1999)によると、大学の偏差値と大学の一般的信頼得点の平均値の間には正の相関がある。山岸はこの分析に基づき、偏差値の高い大学に入ること、学生の信頼感が高まると論じた。しかし、山岸の分析は、10校の四年制大学と2校の短期大学からのサンプルを用いて行われており、さらなる検討が必要であった。本研究では、この議論が正しいかどうかを検討するため、男女共学の4年制の28大学を調査対象とし、4,598ケースのデータを回収した。その結果、個人レベルの分析において、大学の偏差値と学生の信頼感の間に有意な相関は得られなかった。ただし、大学を分析のユニットとした場合、極端に偏差値の高い大学(偏差値70以上)の学生の信頼感の平均値は、それ以外の学生より高かった。

キーワード：一般的信頼、偏差値、大学生

1. 問題

信頼をめぐる議論には種々の流れがあるが、その一つは、機会費用の高い現代社会において、高い信頼をもつことが適応的にはたらくというものである。信頼の解き放ち理論(山岸 1998,1999)によると、社会関係の流動性が高く、機会費用と社会的不確実性が共に高い社会において、人々は社会的知性に裏打ちされた高い信頼感を身につけるようになる。ただし、進化ゲーム的アプローチから適応的とされるこの高い信頼感是一般的信頼感に関するものであり、「相手についての情報がない場合の相手の信頼性に対する“デフォルト値”(山岸 1998,p350)」として定義される。山岸(1998)は、信頼感の日米比較調査において、アメリカの方が日本人よりも他者一般に対する信頼感が高かったことから、社会関係の流動性が高く機会費用が大きいアメリカ社会では、日本社会に比べて人びとの一般的信頼が高くなるのだと論じている。解き放ち理論は、信頼感の高さを、他者を信頼することによりもたらされる自己利益の観点から説明した点で斬新であり、社会心理学のみならず社会科学の諸分野で広く評価された。

解き放ち理論が高く評価された理由のひとつとして、この理論が多くの実験研究にその基礎を置いている点が挙げられる²。しかし、よく統制された実験による知見とともに提示される調査研究からの知見については、再検討の余地が残されているものもある。解き放ち理論を紹介した著書、『安心社会から信頼社会へ』の中で、山岸は、現実には人々を取り巻く機会費用だけではなく、大学生においては将来の社会的・経済的機会を予期するだけで、一般的信頼が上昇すると論じている。その根拠となるのは、複数の大学で

¹ 関西大学社会的信頼システム創生センター、関西大学社会学部

² 例えば北山(1999)は、「一連の実験は、おそらくは社会心理学すべての領域の内でも最もエレガント、かつシステムティックなものの一つに数えられよう(p61)」という言葉で、解き放ち理論の実証的基盤を評価している。また、緻密な実験室実験による実証は、『信頼の構造』が日本経済新聞社経済文化書籍賞を受賞した際の受賞理由にもなっている。

行われた一般的信頼の調査である。この調査の結果、山岸(1999)は、大学の偏差値と大学生の一般的信頼の高さとの間に強い正の相関($r=.66$)があることを報告している。

学歴、所得等の階層変数と信頼感の間の正の関連については、統計数理研究所が行ってきた『日本人の国民性調査』のデータにおいても確認されている(三宅 1998)。また、与謝野・林による一連の研究でも学歴の高さと信頼の間には正の相関がみられている(Yosano & Hayashi 2005, 与謝野・林 2005)。これらの研究において信頼との関連性が指摘されているのは、教育年数の長さであり、大学生のみを対象に、入学試験の難易度を表す偏差値と信頼の関連を分析した点で、山岸(1999)の議論は特徴的である。山岸(1999)は、大学生の所属大学の偏差値と信頼の間に正の相関が見られる理由について、以下の説明を与えている。すなわち、偏差値の高い大学の学生は、自分たちが将来与えられる機会の多様性を予期することで、その機会を効率的に活用できるように信頼感を高くもつようになるとされる。さらに山岸(1999)は、大学偏差値と信頼感の間の相関が、大学1年生では存在しないことから、学生の出自ではなく、将来の機会への期待こそが信頼を育むのだとしている。

この議論において問題とされているのは、個々の大学生の将来の機会への期待と、その大学生の一般的信頼の関連であるが、山岸(1999)の分析で扱われている変数は、大学の偏差値とその大学から得られたサンプルの信頼感得点の平均値である。この分析が行われた時期の日本社会において、大学生が自らの所属大学の偏差値をもとに、将来得られるであろう機会についてある程度の予測をもつと想定することには大きな問題はないと考えられる。しかし、山岸(1999)に報告されている結果は、わずか12校という少ない大学数をもとに計算された、大学を分析ユニットとした相関係数であること、および、就職機会の内容に関して隔たりのある短期大学と4年制大学の混在したデータであることなどの問題を含んでいる。

本研究では、大学生が自らの前に開かれている機会の多様性を予期することで、信頼感を上昇させていくのかどうかを検討することを目的とし、4年制大学に限定して信頼感データを収集した。そして、上記の問題を回避してもなお、信頼と偏差値の間に強い相関が見られるのかを検討した。また、山岸(1999)では個々の大学で得られたデータ数が明らかにされていないため、大学の偏差値と信頼感の間の関係について、データの基本的情報とともに提示することも、本論文の目的のひとつである³。

2. 方法

調査時期 調査は、2002年12月～2003年1月に行われた。

調査対象 男女共学の4年制の28大学を調査対象とし、4,598ケースのデータを回収した(1年生1,967名、2年生1,045名、3年生1,073名、4年生463名; 男性2,340名、

³ 同様の結果を報告した Yamagishi(2001)では、2校の短期大学を含む14大学から得られた2,790ケースのデータによるものと報告されているが、大学別、学年別のケース数などは報告されていない。

女性 2,215 名)。調査対象とした大学ごとのケース数については付表に示した。

調査票の構成 調査票は、一般的信頼感尺度（表 1）、功利主義的人間観を測定するための項目の他、人間の理解可能性についての項目、特定の諺がどの程度現実を反映していると思うかを問う項目から構成された⁴。

調査手続き 調査対象となった大学の教員が授業時間内に配布、回収した。

表 1 一般的信頼尺度

項目	
1	ほとんどの人は信用できる
2	たいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する
3	ほとんどの人は他人を信頼している
4	ほとんどの人は基本的に正直である
5	私は人を信頼するほうである
6	ほとんどの人は基本的に善良で親切である

3. 結果

まず、大手予備校が公開している偏差値データをもとに、回答者の大学、学部、専攻別の偏差値をデータとして入力した。偏差値データの得られなかった 43 ケースについては、分析から除外した。偏差データが得られた 4,555 ケースのうち、一般的信頼尺度の 6 項目すべてに回答している 4,526 ケースを分析に用いた。本調査データにおける学年と偏差値の分布は表 2 の通りである。

表 2 最終的に分析に用いたデータにおける学年と偏差値の分布

	学年				計	
	1	2	3	4		
偏差値	40未満	52	19	55	16	142
	40以上50未満	370	297	200	58	925
	50以上60未満	613	216	265	165	1,259
	60以上70未満	632	326	432	170	1,560
	70以上	294	181	116	49	640
計	1,961	1,039	1,068	458	4,526	

まず、一般的信頼感尺度 6 項目を用いて最尤因子分析を行い、一因子構造を確認した上で、6 項目の加算得点を信頼感指標とした($\alpha=.77$)。この信頼感指標の平均値を、各大

⁴ 諺に関する項目は、山岸(1999)に報告される「人を見たら泥棒と思え」という諺に同意する程度が、偏差値と負の相関をもつとする知見の再検討のために測定された。しかし、諺の意味を知らない回答者のために用意された「この諺になじみがない」という選択肢が選ばれた比率が、一部の大学において 2 割を超えていた。このため、諺項目を分析に用いる場合、システムティックな欠損パターンのあるデータを扱うことになるため、本論文では諺項目の分析を行わない。山岸(1999)は、「人を見たら泥棒と思え」という諺に同意する程度と偏差値の間の負の相関を示し、高偏差値大学の学生と低偏差値大学の学生が異なる社会的知性を発達させている根拠としたが、上記の結果は、偏差値との関連を分析するにあたって諺への同意度という測度が適切とはいえない可能性を示唆している。

学について、文系・理系学部別に算出した。なお、以下に示す分析において、大学（理系・文系学部別）を分析のユニットとしている分析では、回答者数が 30 以下となるケースは分析から除外している。

次に、大学生の信頼感は一様に女性の方が男性より高い傾向にあるため、性差を検討した。その結果、性差は有意であったため(男性:14.99, 女性:15.71; $t(4488)=7.40, p<.001$)、大学をユニットとした分析では、大学ごとのサンプルの男女比を考慮する必要があることが確認された。

大学別の信頼感得点と偏差値

大学の偏差値（理系・文系学部別の平均値）と信頼感の相関係数を求めたところ、相関係数は.49($N=31, p<.01$)であった。女子比率をコントロールした場合の偏相関係数は.48($df=28, p<.01$)であった。偏差値と信頼感の散布図を図1に示す。

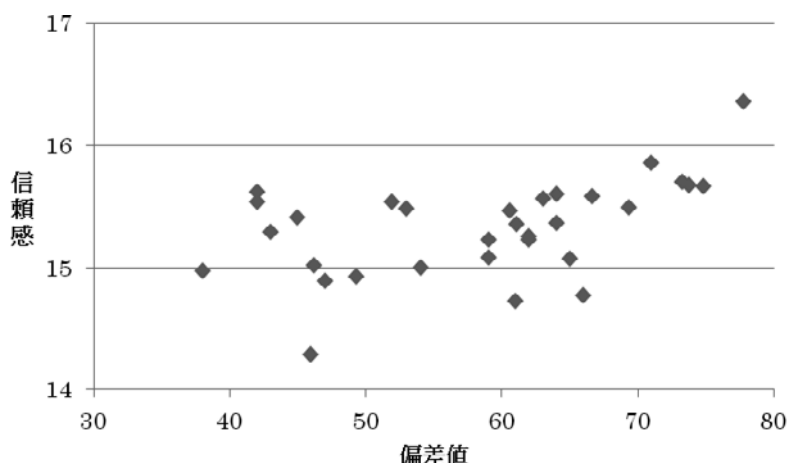


図1 大学の偏差値と信頼感の散布図

図1から明らかなように、偏差値、信頼感ともに非常に高い一大学がある⁵。この大学を分析から除外し、再度相関係数を求めたところ、偏差値と信頼感の相関係数は.40 ($N=30, p<.05$)、女子比率をコントロールした場合の偏相関係数は.39($df=27, p<.05$)であった。

ところで、図1からもうひとつ読み取れることは、上記の1大学を含め、偏差値の非常に高い大学が、信頼感においても非常に高い値を示している点である。図1において、偏差値70未満の部分と70以上の部分は、異なるパターンを示している。偏差値70未満のデ

⁵ この大学の信頼感の平均値は、平均値から正方向に標準偏差の2倍以上離れていた。（大学ごとの信頼の平均値の平均値は 15.327、標準偏差は.398 であった。）

ータでは、偏差値と一般的信頼得点の間には線形の見られないが、偏差値70以上の大学では、正の関係が見られる。そこで、偏差値70以上のデータを分析から除外し、再度分析を行った。その結果、偏差値と信頼感の相関係数は.18($N=26, ns.$)、女子比率をコントロールした偏相関係数は.16($df=23, ns.$)であった。

学年を考慮した分析

上記の分析は、全学年のデータを用いて行われている。しかし、山岸(1999)の議論に従うならば、大学1年生と2年生以上では大学偏差値と信頼感の関連は異なるパターンを示すはずである。すなわち、偏差値の高い大学の大学2年生以上では、将来自らが得るであろう機会の多様性を“予期”することから、信頼感が上昇するとされる。そこで、次に1年生と2年生以上に分けて同様の分析を行った。ただし、本調査が12月から1月にかけて行われていることから、大学4年生はすでに進路が決定しているか、決定していない場合でも機会の多様性について何らかのフィードバックを得ていると考えられるため、4年生のデータも分析から除外した。

1年生における偏差値と信頼感の相関係数は有意水準には達しなかった(全大学： $r=.36, N=17$ ；偏差値70未満： $r=.14, N=15$)。女子比率をコントロールした偏相関係数も同様に、有意水準には達しなかった(全大学： $r=.37, df=14, ns.$ ；偏差値70未満： $r=.13, df=12, ns.$)。2、3年生における偏差値と信頼感の相関係数も有意水準には達しなかった(全大学： $r=.33, N=21$ ；偏差値70未満： $r=.02, N=18$)。女子比率をコントロールした偏相関係数も同様に、有意水準には達しなかった(全大学： $r=.25, df=18, ns.$ ；偏差値70未満： $r=-.03, df=15, ns.$)。両者の散布図を図2a,bに示した。なお、図2a,bでは全大学を用いているが、それぞれケース数が30以下の大学を分析から除外しているため、プロットされている大学は一部異なる。

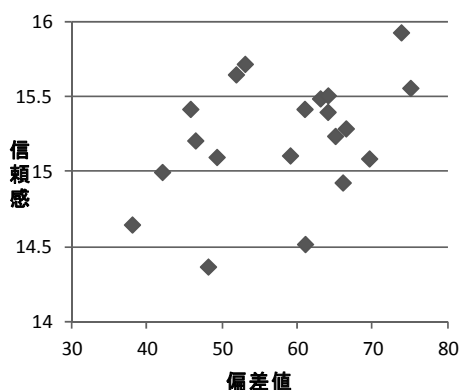


図2a 偏差値と信頼感（1年生）

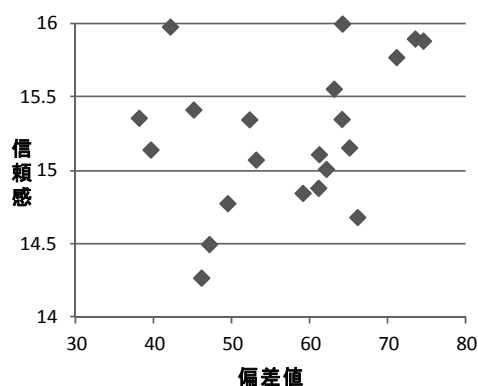


図2b 偏差値と信頼感（2・3年生）

個人をユニットとした分析

次に、大学ごとの信頼の平均値ではなく、個人を分析のユニットにして分析を行った。山岸(1999)同様、本データは、大学毎に回収されている。このようなデータを用いる際、広い意味での大学の校風や社会的環境が学生の社会意識に影響を与えている可能性を考慮し、二段抽出モデルを検討する必要がある。そこで、一般的信頼尺度の6項目について、大学を一次抽出単位とした級内相関の大きさを検討した。その結果、級内相関係数(ρ)は最大でも.007であった。この結果は信頼得点の変動のうち大学のクラスタにより説明される割合が極めて小さいことを示しているため、以下の分析では、分析のユニットを個人として、信頼と偏差値の関連について検討する⁶。なお、ここでは偏差値70以上の大学を含め、全データを用いて分析を行う。

まず、信頼感を従属変数、性別と学年を独立変数とした分散分析を行った。その結果、性別の主効果のみが有意であり($F(1,4450)=42.05, p<.001$)、学年の効果は有意ではなかった($F(3,4450)=1.21, ns.$)。次に、大学1年生、2・3年生、4年生の3群に分け、性別をコントロールした偏差値と一般的信頼得点の偏相関係数を求めた。その結果、1年生では $r=.02(ns.)$ 、2・3年生では $r=.04(ns.)$ 、4年生では $r=.06(ns.)$ で、いずれも偏相関係数は非常に小さかった。

高偏差値群の信頼感

上記、大学をユニットとした分析において、偏差値70以上のケースを除外しない場合には、大学偏差値と信頼感の平均値の間に有意な正の相関がみられた。本研究で得たデータのうち、大学別データで偏差値70以上であったケースは4ケースと少なく、大学をユニットとした分析から、偏差値が極端に高い場合の機会の多様性の効果について何らかの結論を下すことは適切ではないだろう。ここでは、個人をユニットとした分析において、高偏差値群の信頼感についてさらに検討を加える。まず、所属大学学部学科の偏差値が70未満の群($N=3913$)と、70以上の群($N=642$)の間で信頼感の高低に差があるかどうかを検討した結果、偏差値カテゴリと性別を独立変数とした分散分析において、性別の主効果($F(1,4460)=22.0, p<.001$)および偏差値の主効果($F(1,4460)=6.66, p<.05$)が有意であり、女性群において(男性:15.15, 女性:15.83)、また70以上群で有意に信頼感が高かった(偏差値70未満:15.30, 70以上:15.67)。次に、偏差値70以上群のみを取り出し、性別と学年(1年生, 2~3年生の2値)を従属変数とした分散分析を行ったところ、性別の主効果が有意であり($F(1,579)=4.67, p<.05$)女性の信頼感が高かった(男性:15.41, 女性:16.00)。学年の主効果は有意ではなく($F(1,579)=2.30, ns.$)、偏差値70以上群では70未満群よりも信頼感が高いが、その信頼感は、入学後に上昇するものではないことが明らかになった。

⁶ Muthen(1997)は、級内相関係数 $\rho \geq 0.1$ で、1次抽出単位が15を超えるとき、二段抽出モデルで分析すべきだとしている。

4. 考察

本研究では、大学生の将来の機会が信頼を育むという山岸(1999)の議論の再検討を行うために、複数大学のデータを用いて大学偏差値と所属学生の一般的信頼の関連を分析した。大学を分析のユニットとした場合、大学偏差値と学生の一般的信頼得点の間に正の相関がみられた。この有意な相関は、偏差値 70 以上の大学を除外することで消失した。個人を分析のユニットとした場合、大学 1 年生、2、3 年生、4 年生の各段階において、所属大学の偏差値と一般的信頼の間に相関は見られなかった。ただし、全学年を併せた分析において、偏差値 70 以上群と 70 未満群の間には一般的信頼の平均値に差があり、高偏差値群の一般的信頼が高かった。

山岸(1999)は、大学偏差値と信頼感の間の相関が、大学 1 年生では存在せず、2 年生以上でのみ見られることから、学生の出自ではなく、将来の機会への期待こそが信頼を育むのだと論じている。しかし、上記の分析結果は、高い偏差値の大学に入ることによって学生の信頼感が高まったのではなく、そもそも信頼感が高い生徒がこれらの大学に進学したことを示唆している。

現代の日本社会において大学の偏差値と所属学生の就職機会の間のある程度強い関連を想定することには無理がないだろう。しかし、大学偏差値はあくまで入学試験の難易度の指標であり、就職機会の指標として扱うことは必ずしも適切とはいえない。また、Yosano & Hayashi (2005)の 20 歳～59 歳の男女を対象とした調査研究において、親の職業威信が本人の学歴（教育年数）と世帯職業威信を介して、間接的に本人の信頼感に正の効果を与えることが確認されている。大学生の信頼の規定因については、こうした出自の影響をも含めた形で、再度検討する必要があるだろう。

【附表】

附表 大学ごとの回答者数

大学	人数
A	97
B	84
C	52
D	307
E	112
F	24
G	82
H	958
I	149
J	47
K	268
L	32
M	129
N	222
O	151
P	162
Q	32
R	133
S	615
T	22
U	105
V	195
W	99
X	159
Y	161
Z	96
イ	66
ロ	39
計	4958

【謝 辞】

本研究のデータ収集にあたり、多くの先生方にご協力いただきました。本稿で信頼感の値を報告した大学名を明らかにしないため、おひとりおひとりのお名前をここで挙げることは避けさせていただきますが、ご協力に対し深く感謝申し上げます。研究協力者の与謝野有紀氏には、附表 H～ロ大学のデータ収集について、ご尽力いただきました。深く感謝いたします。調査の実施に当たり、木田望氏、安福陽子氏、村上桂子氏のご協力を得ました。記して感謝します。

【引用文献】

- 北山忍, 1999, 「社会心理学の使命と『信頼の構造』の意義：ゲーム理論と文化心理学」
『社会心理学研究』 15(1):60-65.
- 三宅一郎, 1998, 「信頼感」統計数理研究所・国民性国際調査委員会（編）『国民性七か
国比較』出光書店, 133-40.
- Muthen, Bengt, 1997, “Latent variable modeling of longitudinal and multilevel data,”
Sociological methodology, 27(1):453-480.
- 山岸俊男, 1998, 『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』, 東京大学出版会.
- 山岸俊男, 1999, 『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』, 中央公論新社.
- Yamagishi, Toshio, 2001, “Trust as a form of social intelligence,” Karen S. Cook Ed., *Trust
in Society*. New York: Russell Sage Foundation. 121-147.
- Yosano, Arinori and Nahoko Hayashi, 2005, “Social Stratification, Intermediary Groups and
Creation of Trustfulness.” *Sociological Theory and Methods*, vol.37:27-44.
- 与謝野有紀・林直保子, 2005, 「人が他人を信じるときー社会関係資本と地域の活性化
ー」『関西大学経済政治研究所双書』 137:101-129.

Does a diverse opportunity nurture trust?

- A survey study on the general trust of college students -

Nahoko HAYASHI

【Abstract】

This study re-examines the relationship between the relative standing (hensachi) of the college and the level of general trust of the students. Yamagishi (1999) reported that the relative standing of the college is positively correlated with the students' average score on the general trust scale. Based on this analysis, Yamagishi (1999) argued that belonging to elite colleges makes students high trusters. However, because Yamagishi (1999)'s analysis used a sample from only 10 colleges and 2 junior colleges, further investigation was necessary to draw a conclusion. We collected data from 28 colleges (N=4598) and examined the relationship between the level of general trust and the relative standing of the college both at the college level and the individual level. The results of the analyses using individual data suggest that the level of general trust is not significantly correlated with the ranking of the college to which students belong. However, the mean of general trust scores of the sample from universities with an extremely high score of hensachi (over 70) was significantly higher than that of the others.

Keywords and Phrases: general trust, hensachi, college students